

「自分のみじめさの自覚と神への感謝」

ローマ7：14－25

堀田修一 23・5・7

I 善を行いたいと願う自分に悪、罪が心に住んでいる原理、法則。：14－21。本日の箇所が、深く理解できるのは、主を信じ、洗礼を受け、時間が経つにつれ、ますます、みことばと御聖霊により、自分の心の内側の罪深さに気づかされ、正しい意味で自分の心の罪と戦っている人々です。皆さんは、どうでしょうか。洗礼を受けた後、ますます、自分の罪深さが分かり、主の十字架と復活と御聖霊の恵みを深く理解し続けているのではないのでしょうか。それこそ、誠実なクリスチャンの姿です。14－21節のみことばを、じっくりと見つめましょう。

「私たちは、律法が霊的なもの（神の聖、義の本質を示すもの）であることを知っています。しかし、私は肉的な者（罪の性質を持つ者）であり、売り渡されて罪（アダム以来の原罪）の下にある（罪の奴隷である）者です」：14。

「私には、自分のしていることが分かりません。自分がしたいと願うこと（神のみこころに従うこと）はせずに、むしろ自分が憎んでいること（神の喜ばれない罪、悪）を行っている（現在形：主を信じ救われた者の罪の現実）からです」：15。

「自分のしたくないことを行っている（自分が神の背く罪、悪をしたくないという自覚がある）なら、私は律法に同意し、それ（神の律法、戒め）を良いものと認めている（が守ることが出来ない）ことになります」：16。

「ですから、今それ（神に背く罪、悪）を行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる（私の心に住みつき、占領している）罪（原罪）なのです」：17。

「私は、自分のうちに、自分の肉のうちに善（神に喜ばれる善）が住んでいないことを知っています。私には良いこと（神に喜ばれること）をしたいという願いがいつもあるのに、実行できない（私たち人間には、神の律法を守りたくても、それを実行する力がない）からです」：18。

「私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています」：19。私たち罪人の人間は、したいと願う善（神に喜ばれる善）を行えないで、悪いことを、ついつい行ってしまふ。

「私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪（原罪）です」：20。

「そういうわけで、善を行いたいと願っている、その私に悪が存在するという原理（法則）を、私は見出します」：21。「善（神の喜ばれること）を行いたいと願っている」ということばから、この7章は、パウロが、主を信じる前のことではなく、主を信じ救われた後も、この地上では、自分の心の罪との霊的な戦いは続くという事実を深く教えている。これは、真実に生きるキリスト者にとり、むしろ慰め、励ましとなる。「主を信じ救われ洗礼を受けた後も、私は罪との戦いにおいて、勝利もあるが敗北もある自分が、真の救いを受けていないのではなく、あの偉大なパウロも、すべての真実なキリスト者も、この地上では、神の恵みと共に、自分の心の罪との戦いを続けるのは聖書的な姿なのだ」と。

II 自分の本当のみじめさの自覚と神への感謝

「私は、内なる人（主を信じ、御聖霊により新しくされた心）としては、神の律法を喜んでいますが」：22。キリスト者には、この地上では、二つの心がある。一つは、神の律法を喜ばない、罪の心が残っている。もう一つは、主を信じた時に、御聖霊の内住による新生の恵みにより、新しくされた内なる人、神の律法を喜ぶ心がある。

「私のからだには異なる律法（罪の法則。原語では、この律法と原理、法則は同じギリシャ語の「ノモス」）があって、それが私の心の律法（ノモス）に対して戦いを挑み、私を、からだにある罪の律法（法則。ノモス）のうちにとりこにしていることが分かるのです」：23。主を信じた後も、主の再臨までは、主と御霊によって神の律法、みことばを喜ぶ新しくされた心の法則と心に残っている原罪の法則との戦いがある→「こうして、この私は、（主と御霊が新しくされた）心では神の律法に仕え、肉（罪の性質が残っている心）では罪の律法（原理、法則）に仕えているのです」：25。

「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」：24。聖書は、旧約聖書に登場する神の器や民たちも、新約の12使徒も弟子たちも、立派な点と罪や欠点、弱さがあつたと正直に記しています。ここに、聖書は真実で信頼できる書という確信が増します。「かつて書かれたものはすべて、私たちが教えるために書かれました。それは、聖書が与える忍耐と励ましによって、私たちが希望を持ち続けるためです」ローマ15：4。私たちは、神が下さる66巻の聖書に、人間が苦しみや迫害の中で神に従った励ましと神に用いられた人たちの弱さ、罪、失敗が記されているとき、慰めと励ましを受けます。神は、弱さ、失敗、罪のある人々が神に立ち返る時に神は赦し、変わらない愛で愛し、励まし、立ち上がらせて下さるのだと慰められ励まされます。キリスト者は、いつもこの二重の現実に生きているのです。神に、神の力で喜んで従う日。又は、高ぶりや自分の弱さのため、神に罪を犯してしまう日もある。「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだ（罪のからだ）から、私を救い出してくれるのでしょうか」と叫びたくなる日もあるのです。この24節の「みじめ」とは、見るに耐えないほど哀れで、痛々しい様子を示します。その背後に、パウロの長い間の悩み、苦しみ、戦いがあり、その結果として自分のことを「みじめ」と呼んでいます。しかし私たち罪人には、次の叫びが出来るのです→「だれが…私を救い出してくれるのでしょうか」：24。こう神に叫び問える私たちは、幸せ者です！その答え＝「私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します」：25。このみことばの直訳は「神に感謝。私たちの主イエス・キリストを通して」。自分の罪深さ、罪に縛られて真の救いにほど遠い「みじめさ」を深く自覚すればするほど、救いの愛の御手を差し出しておられる神に「ただただ感謝しかありません」。罪深く、みじめで、絶望的な私たち。永遠の罪への刑罰、永遠の滅びが待っている人生でした。そんなみじめで罪深い私たちを神は愛して主イエス・キリストをこの世に遣わし、主の十字架と復活により私たちの救いを成就して下さったのです。主の十字架の死によって私たちの罪を贖って下さったばかりか、主は私たちの心に住み、私たちに日々勝利と悔い改めを与えるために力を与えて下さる方です。さらに、主は、世の終わり、神の時に、この世に再臨され、私たちの死のからだ、罪のからだ、卑しいからだを、ご自身と同じ栄光のからだによみがえらせてくださいます。ですから、主を信じ救われている私たちには「感謝」しかありません。これこそ主にある私たちが生きるすべての動機です。ここから私たちの歩みが始まるのです。主にある私たちが生きるとは、「神への感謝で生きる」ことです。その感謝は、自分に罪の自覚と自分の力ではみじめで絶望しかないという自覚が深いほど、さらに大きな感謝となり、そこから献身（牧師、伝道師、宣教師に限らず、神に心から感謝し、神と人に仕え神の栄光を

現すすべてのキリスト者)の生涯が始まります。キリスト者とは、少々不思議な面があります。
①神なしの「自分のみじめさ」の自覚と②神の恵みによる「神への感謝」をもって生きる人生。
この人生を私に語りかけるみことば＝「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる」哀
歌3：22。『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばは、ま
ことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです」I テモテ1：
15。真の救いの神にただただ感謝します！